湾岸戦争の波紋と今後の世界情勢

サダム・フセインさんも、アメリカがあれほど急に乗り込んでくるとは思っていなかったのでしょう。彼も誤算だったかもしれませんが、私もまさかあのような結果になるとは思いませんでした。私のクウェートでの経験からしまして、あの暑さの下で戦車の中にいて国連軍が戦争をするのは大変なことだ。しかも相手のイラクは、イランとの間で八年間も実戦を経験している。ところがいざ始まるや、地雷は一挙に爆発させるはピンポイントのねらい打ちの爆撃はやるはで、あのような短期間に終わってしまいました。ただ、サダム・フセインもやられはしましたが、からくも親衛隊を残すなどしておりまして、イラクではまだ彼が頑張っております。イラ・イラ戦争の際にも、『悪魔の詩』ではありませんが、イランは反対する者には刺客を差し向けて息の根を止めるという戦法を取っておりました。しかし、そのイランと八年間も戦争して、サダム・フセインはやられなかった。なんでも影武者としてソックリさんが何人もいて、どれが本当の大統領かわからない格好にして生き延びてきたという話もあります。

アメリカないしは西側が懸念していたのは、イラクが中東第一の軍事大国になって油を抑えてしまうことでした。そうなると中東の勢力のバランスがどうなるか。イラク一色になるのではないか。その心配が一応取り除かれたわけですから、国際正義の面から見て、相手の中まで踏み込んで為政者をやっつけるということはしませんでした。イラクの軍事力が縮小された結果、代わってお隣のイランになかなかの力が出てきたようです。しかし、あの戦争のよかった点と言うと少しおかしく聞こえるかもしれませんが、中東の和平の話がアメリカとソ連を中心にかなり煮詰まってきて、最後にはパレスチナの代表を誰にするかで、近々落ちつきそうなところまできています。これが成功すれば、それがあの戦争のプラス面だったと言えそうです。

あの戦争の結果、テレビでいろいろなものをリアルタイムで見せてもらいました。おかげで中東に関する知識も進み、イスラムに対する理解も深まったのではないかと思います。生活様式も異なり、われわれとはまったく違った宗教であるイスラム教は、アフリカのモロッコあたりからアジアのインドネシアまで広がり、それにソ連にも数千万のイスラム教徒がおります。つまり、世界の人口の約四分の一はイスラム教徒というわけですから、われわれも生活や信条は違っていても、それに対する理解が必要であろうかと思います。特に日本は中東に油を依存しております。しかし、油とは無関係に、世界の四分の一を占める人たちとの相互理解を深めるということが、今後とても重要です。

イラ・イラ戦争のとき、世界中がイランに対して門戸を閉ざしておりました。ところが日本だけは、イランの人が観光ビザで三カ月間来るのは自由、唯一の開かれた国という関係であったわけです。そのため、今でもイランからはたくさんの労務者が来ています。私の家内の実家は茨城県にあるのですが、小さな町に二百人ぐらいイランの人が来ていて、手先も起用で一生懸命やると、なかなか評判がいいようです。このようなことが広がって、中東の人との関係が深まればおおいに結構だと思います。

主としてアメリカ主導型で湾岸戦争もあいう形で終結を見たわけですが、こうして見てみると、世界の構図の中で、ソ連の力というか、グリップというものが昔に比べてずいぶん低くなりました。そのためかえって、アメリカ・ソ連の協力で中東和平も今後うまくいくのではないかと思います。

ソ連のグリップが弱くなっているということは、ソ連の経済がうまくいかない点にあると思います。市場経済への移行と言いながら、それが思うようにいかない。先日、ソ連の経済の専門家のお話を聴きましたが、物がないのではなく物はたくさんある。ただそれがうまく流通機構に乗らない。そのため必要なところに行き渡らない。このことがいちばんの問題だということです。食糧にしてもそのようだそうです。インセンチィブというか、どこか他で作った物、ソ連国内で物を生産した人の励みになるような物があって、それと交換に物資が市場に出回るようにしてもらえれば非常にありがたい。外からはそういう意味での援助を期待する、とソ連の経済の専門家は言っております。ただ、内政面でも、この前のクーデターの失敗もあり、共産党が事実上失権して、連邦制にガタが来ました。その結果、ロシアを始めとする各共和国が

平成四年度　東京同窓会のお知らせ

十月二日（金）午後五時開催予定

於・茗蹊会館

強くなって、エリツィン大統領がひときわ頭角を表すことになったわけです。そのほか民族主義も強くなり、バルト3国が独立しました。

そのような情勢の中で、日本として気になるのは北方領土の問題ですが、これに関しては、昨日のソ連の新聞イズベスチァによると、一八五五年の下田条約でロシア領土はウルップ島より北であると定めている、ということをソ連側が始めて認めたというところまできているようです。連邦制でありながら各共和国の力が強くなっている実状から、日本としても誰と交渉してよいのか、どこにポイントを置くのかが問題になりますが、だんだん向こうも冷静になってきて、昔の資料で正しい事実を認めようとし始めたわけですから、日本としては現実を見つめ、あわてないでじっくりやっていく必要があるのではないかと思います。特に四つの島にはもう四十年も住みついている人たちがいます。やはり住めば都、この人たちにとっては、自分の国・自分の町となっているわけです。ですから、それに対しては十分な補償をする。また、主権が日本に返ってきても、どうしても住みたい人にはそこにいてもらえばいいだろうと思います。私個人の考えですが、米ソの冷戦状態がここまで沈静化し軍縮がさらに進めば、日本に主権をゆだね、北方4島は非軍事地帯ということにして、お互いの経済開発の拠点に使えれば非常にいいのではないかと思います。

『外から見た日本』というのは漠然として大きな題ですが、考え方は、今のソ連との交渉からもわかる通り「日本から見た世界」ということでもあります。日本としては日米安保体制の基にここまで来ました。アメリカとソ連の冷戦状態が緩み協調の時代となった今、もう安保はいらないというわけではありませんが、このままでいいかを見直さなければなりません。日本はまったく無防備でいいとはいきませんので、憲法の下でどうしたら正しく日本を守れるか、専守防衛がどういう手段ならばムダなく行えるのかなど、さらにいろいろなことを考えれなければならないと思います。

思い出される皇室外交の実績の数々

今まで海外にいていろいろ感じたことがありますが、時間に限りもありますので、特に強く感じたことを一点だけ申し上げたいと思います。それは皇室外交ということです。イギリスも王室外交をやっておりますが、日本は日本なりの皇室外交というのが非常に印象的であります。前の昭和天皇は、非常にお人柄が純粋で、ひたむきで物事をゆるがせにしない方であったという感じがしております。五年前の一九八六年の秋、昭和天皇のお人柄に惹かれて、ぜひ公式訪問をしたいという希望がありまして、フィンランドのコイビスト大統領が来日しました。昭和天皇にお目にかかれるのが外国の元首の日本に来る楽しみで、おおいに感激をするという様子でございました。たまたまフィンランド大統領の来日を前に、私に一時間のご進講をしろとのことでした。その間にざっくばらんにいろいろ申し上げましたが、たとえばその中で、フィンランドの特徴は3つのSであり、3つのSとは、サウナであり、作曲家のシベリウスであり、シスという言葉であるというお話を申し上げました。シスというのは、SISUと書いて「フィンランド魂」、ガッツと言うか、昔のわれわれの大和魂に等しいものがあります、などとご説明申し上げました。その後、天皇からフィンランドの政治などについて、いろいろご下問がありましたが、さらに「先ほど大使はサウナと言ったが、サウナとは何だ」と申されました。えっ、天皇はサウナをご存知ないのか、と思いましたが「まぁ、蒸し風呂のようなものです」と申し上げておきました。

その後もいろいろお話がありましたが、「大使はオーロラを見たことがあるか」と言われましたので「残念ながら見たことはございませんし、見た人の話も聴いたこともございません」と申し上げました。「本当に見たことがないのか」と、再度お尋ねになりましたので、「私がロンドンに赴任中に、天皇・皇后両陛下がヨーロッパを訪問されて、アラスカの上を飛ばれた際、陛下ご自身がオーロラをご覧になったという話は新聞で拝見しておりますが、私は見たことがございません」と申し上げましたところ、首を傾げておられました。

天皇陛下にあまで不審がられては、何か申し訳ないような気分でしたが、天皇陛下はよくよく運のいい方だったのでしょう。アメリカへ行かれるときもヨーロッパへ行かれるときも、飛行機の窓からオーロラをご覧になられたわけです。私が一九七一年にロンドンにいたとき、両陛下が来られたのですが、その日はものすごく霧が深くて、飛行機が着けるか着けないかという状態でした。ところが陛下がタラップを降りられるときになって、急にパッと空が明るくなり、その上だけに陽が射してきたのです。天気の具合とは言え、通常そんなことは考えられません。やはり天皇陛下は一種違うんだなぁ、感じがいたしました。天皇陛下は、ご自分がご